

## OUIK 研究コラム

国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット (OUIK) の研究について、その背景や方向性、活動内容等を紹介いたします。「都市と生物多様性」の分野では、国連大学高等研究所客員教授を兼務する北海道大学の敷田教授が主導しています。

## OUIK 研究部門

里山・里海  
持続可能な農林水産業  
都市と生物多様性

### 都市と生物多様性：金沢の豊かな都市文化と自然環境とのかかわりに着目した、生物文化多様性の視点に基づく都市デザインの提案について

北海道大学教授  
敷田 麻実

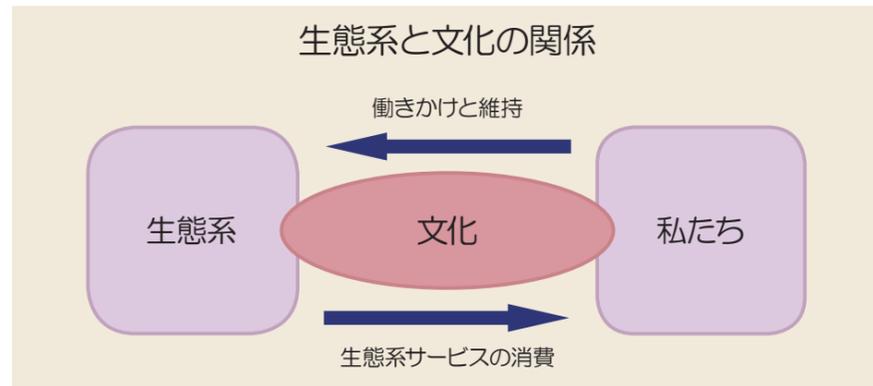
都市は生物多様性にとって「不毛の地」なのだろうか。実際、里海や里山の豊かな生態系に比べれば、開発された都市では生物多様性が色あせて見える。しかし、よく考えてみると、都市があるからこそ存在している生態系も多い。例えば、都市公園は一見人工的に見えるが、そこには昆虫や鳥など様々な生物が生息し、生態系を形成している。金沢市の場合、その中心部にある金沢城公園は、隣接する兼六園とともに豊かな生態系を育み、都市空間の重要な要素となっている。金沢市民は、この空間で豊かな都市生活を享受しているが、緑に囲まれた場所があるからこそできるイベントや、緑陰が美観を引き立てる歴史的建築物は金沢の文化的特長であろう。

ただし、都市の生態系は、地方や都市周辺部と比べると、規模や多様性という点で見劣りする。一方で、文化は都市に集中しているように見える。そのため、ともしれば、生物多様性は「田舎」、文化や創造性は「都市」に特有のものとして割り切ってしまう、両者の関係を顧みることが少なくなる。

ところが、都市が生物多様性の維持に果たす役割は大きい。なぜなら、都市内部における生態系保全もさることながら、消費地としての都市が、里山や里海を擁する地域の生産に大きな影響を与え得るからだ。地域の第一次産業は都市の消費、つまりマーケットを意識して生産活動を行っている。また、いかなる環境配慮型農業においても、消費者に支えられない生産は成り立たない。そうした意味で、都市は大きな役割を担っているのだ。

逆に、都市文化の形成にも生物多様性が有用である。例えば金沢では、加賀野菜を中心に豊かな食文化が生まれ、独特の調理法や食物への愛着が受け継がれている。また、豊かな食事の場から文芸や技芸が生まれることもある。このように、地域の生物多様性は、確かに都市文化を支えている。

生物や文化の多様性にかかわる都市と地域の相互作用を解明するために、OUIK では文化多様性と生物多様性を融合して考察する「生物文化多様性」の研究を開始した。「生物文化多様性」という新しい概念によって都市と地域の関係を再構築する上で、金沢は重要なモデルとなるであろう。



国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット



# OUIK Newsletter

Vol. 1 No. 2  
2012年9月18日発行

## OUIK に期待すること

### 国連大学副学長 武内 和彦



略歴

国連大学副学長（2008年より）、同サステナビリティと平和研究所（UNU-ISP）所長（2009年より）を併任。東京大学サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）機構長。日本造園学会顧問、中央環境審議会自然環境部会長、食料・農業・農村政策審議会委員などを歴任。  
専門は、緑地環境学、地域生態学、地球持続学。日本の里地里山の再生を目指すとともに、伝統的な土地利用の再構築に向けた世界の多様な取り組みとの連携を目指す SATOYAMA イニシアティブにも深く関与。  
最近の著作には、『地球持続学のすすめ』（岩波ジュニア新書、2007年）、『生態系と自然共生社会』（共編著、東京大学出版会、2010年）等がある。

国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット (OUIK) は、今年度より「里山・里海」、「持続可能な農林水産業」、「都市と生物多様性」を研究活動の3本の柱として位置付け、その活動の一層の推進に努めています。まず第一に、OUIK が中心メンバーとなって実施してきた「日本の里山・里海評価」、いわゆる JSSA (Japan Satoyama Satoumi Assessment) の成果は、2010年愛知・名古屋にて開催された生物多様性第10回締約国会議 (CBD/COP 10) において発足した SATOYAMA イニシアティブの概念形成に大きく貢献しています。私自身この研究の推進にあたり、金沢大学の中村浩二教授とともに共同議長を務めてきたことから、今後ともこの分野における更なる進展を図っていきたく願っています。

また世界農業遺産 (GIAHS) につきましては、2011年6月、石川県の4市4町（七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、中能登町、穴水町、能登町）が新潟県佐渡市とともに認定されたところであり、これらの地域は先進国初の認定サイトとして、国内のみならず世界から注目を集めています。OUIK は、能登地域の里山において実践されてきた伝統農法や適応管理などに着目した研究活動を展開してきており、GIAHS の世界的研究ネットワークへの貢献が期待されています。

更に「都市と生物多様性」では、生物多様性条約事務局が中心となり、世界の最先端の研究者を動員して「都市と生物多様性の総括評価 (アウトルック)」プロジェクトを推進しているところですが、この分野においても OUIK の研究活動の成果が見込まれています。

このように OUIK の活動は、地元に軸足を置き、国際研究に貢献していくという当初の目的に沿って今後とも各方面での進展が目撃されるところであり、国連大学としても更なる発展を期待しています。

本年10月にインド・ハイデラバードで開催される CBD/COP 11 では地域の取り組みを国際社会に発信することが重要であると考えており、この意味でも7月、9月と連続で開催される CBD/COP 11 公開セミナーシリーズを通じて、石川・金沢からの発信をより一層確かなものにしていけるものと確信しています。

## OUIK の活動目的

1. 持続可能な社会づくりを目指し、地域のパートナーと協働しつつ、国際社会が取り組む研究活動に対し、地域レベルの視点から貢献していく。
2. 国際動向に関する最新情報を共有しつつ、普及啓発・人材育成活動を通じ、地域の多様な関係者との対話を進め、ネットワークを構築していく。

発行：2012年9月18日

国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット (UNU-IAS OUIK)

〒920-0962 石川県金沢市広坂2-1-1 石川県政記念いのき迎賓館3階

Tel : 076-224-2266

Fax : 076-224-2271

E-mail : unu-iasouik@ias.unu.edu

http://www.ias.unu.edu

## CBD/COP 11 公開セミナーシリーズ第1回「石川・金沢の里山里海」

### セミナーレポート

2012年10月、インド・ハイデラバードで生物多様性条約第11回締約国会議（CBD/COP 11）が開催されます。これを踏まえ、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（OUIK）では、生物多様性保全に関する国際動向や地域の取り組みに対する理解を深め、会議への関心を高める機会として、CBD/COP 11 公開セミナーシリーズを企画しました。初回の7月2日は、「石川・金沢の里山里海」をテーマに開催され、75名の参加がありました。

#### 【基調講演】

SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）事務局次長の鈴木渉氏は、SATOYAMA イニシアティブの取り組みや IPSI 発足の背景について紹介しました。また、里海に関しては、「愛知目標」の中に水産資源の持続的な管理・利用が含まれていることや、宮城県塩竈市浦戸諸島における IPSI の活動事例について言及がありました。鈴木氏は更に、国連持続可能な開発会議（リオ+20）において開催された、SATOYAMA イニシアティブのグリーン経済への貢献に関するサイドイベントについて紹介し、未利用資源の活用を通じてグリーン経済を実現し、自然共生社会を再構築していく上で、IPSI が経験と情報の共有の場、及び協力推進のネットワークとして機能する方向性が確認されたことを報告しました。

次に、金沢大学教授の中村浩二氏は、これまでの石川・金沢の里山里海に関する取り組みへの貢献について発表しました。代表的なものとして、2006年から2010年に実施された日本の里山・里海評価（JSSA）、能登地域の世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage System: GIAHS）の認定、金沢大学による「能登里山マイスター」養成プログラム等が挙げられ、それぞれの背景や特色、成果や課題について説明がありました。また、

中村氏は、グローバル化や過疎・高齢化に伴う里山・里海の生物多様性及び生態系サービスの変化が国内外で共通の課題となっていることや、特に能登地域では人材や資金、生物多様性に関するデータベースなどの情報が不足していることを指摘した上で、石川・金沢におけるより詳細なレベルでの調査の実施や、里山里海の取り組みを国際的に発信することの重要性を強調しました。



会場の様子

#### 【パネルディスカッション】

##### （冒頭発表）

石川県環境部里山創成室長の渡邊泰輔氏は、「能登の里山里海」GIAHS の認定の経緯を踏まえ、石川県の行政施策を紹介しました。また、国内の取り組みとしては SATOYAMA イニシアティブ推進ネットワーク（仮称）の設立を、国際的な発信としては GIAHS の認定にかかる国際会議の開催を目指すという今後の石川県の方向性を示しました。

金沢大学准教授の香坂玲氏は、生物多様性条約を巡る先進国と途上国の主張や、CBD/COP 6（2002年）で採択された「2010年までに生物多様性の現在の損失速度を顕著に減少させる」という2010年目標が達成されなかった理由等、生物多様性に関する国際動向を紹介しました。また、より具体的な数値目標を盛り込んだ「愛知目標」が現状把握及び傾向認識のツールとなり得る点を評価し、能登における生物多様性のデータ不足に対しても、基準となるツールを活用し現状を把握するとともに、傾向を分析することが重要であると指摘しました。更に、農林漁業分野の生物多様性保全に関する「愛知目標」（目標7）に関連して、能登の民宿群「春蘭の里」におけるグリーンツーリズムや高齢者間の交流促進を事例に挙げ、地域の問題の分析や付加価値の向上が今後の課題となると述べました。



開会挨拶：竹本 OUIK 所長

#### （討論）

##### （1）「能登里山マイスター」養成プログラムについて

中村氏は、修了生のうち独立して農業を行う人は少ないものの、集団農業経営、法人あるいは関連産業への就職、インターンシップを含めると就農者は多いと述べ、今後は補助金制度の活用等により、地元自治体を中心に就農体制を整備して支援していくことの重要性を強調しました。また、ポストマイスターでは出資する奥能登の自治体や活動拠点が増えたことに触れ、事業の成果をアピールして更なる資金調達に努めることが課題であるとしました。

渡邊氏は、石川県によるポストマイスターへの支援のほか、農業人材機構の新規就農者支援等、県内で実施されている具体的な取り組みを紹介しました。

##### （2）能登における生物多様性のレベルについて

中村氏は、能登の生物多様性について総合的かつ定量的な情報の蓄積が不足していることを指摘しました。例えば、能登には他の地域で見られない絶滅危惧種が生息する一方、トキやコウノトリが捕食する生物の生息範囲は不明であるとし、佐渡や豊岡で実施されたものと同様の手法による調査の必要性を説きました。また、こうした調査には多大な労力がかかるため、石川県を中心に各自治体が調整しながら基本的な情報を整理し、情報基盤を構築することが重要だと強調しました。

##### （3）CBD/COP10における先進国と途上国の対立について

鈴木氏は、資金と技術を求める途上国の要望に対し先進国が抵抗を示す構図が交渉の基本にあることを説明し、CBD/COP 10では特に遺伝資源へのアクセスと利益配分（Access to Genetic Resources and Benefit Sharing: ABS）が大きな争点であったと述べました。また、社会経済における生物多様性の主流化が重要な課題であるという点は途上国と先進国の双方にとって共通の認識であり、CBD/COP 10で関心が高まった地域や企業の役割にも触れました。

香坂氏は、CBD/COP 10における ABS の議論に象徴される国際動向を能登半島に当てはめ、環境問題を公平性と絡めて議論する必要性を強調しました。また、リオ+20で議論されたグリーン経済については、中国における有機農業や人材育成などの促進を先進事例として紹介し、日本も独自の付加価値を創出することが重要だと述べました。

##### （4）SATOYAMA イニシアティブ推進ネットワーク（仮称）について

渡邊氏は、SATOYAMA イニシアティブ推進ネットワーク（仮称）については、生物多様性保全に関心のある都市

部のNPOや企業と、保全ニーズのある自治体とのマッチングを支援するほか、地域の産物を通して過疎・高齢化が進む地域の支援を喚起するという事業展開の構想を紹介しました。

##### （5）石川・金沢の里山里海を国際発信することの県民・市民から見た意義について

中村氏は、素晴らしい里山・里海が身近にあることを認識し誇りに思うことに意義があるとし、その価値を正確に発信するためにも、生物多様性の定量的な調査や結果の開示が重要であると述べました。

鈴木氏は、CBD/COP 10や国際生物多様性年のクロージングイベントの成功は、豊かな里山里海を背景とした食や文化などが影響しているとし、地域の価値を高く評価し発信する意義が十分にあると述べました。

渡邊氏は、生活基盤が異なる地域では生物多様性の概念も異なることに触れ、社会と経済と生物多様性の繋がりを理解して生活基盤を将来世代へいかに引継ぐかを考えることの重要性を示しました。

香坂氏は、若手の国際会議への参加が人材育成に繋がると述べ、国際会議を積極的に誘致することで、国内需要だけでなく国際的な需要を高め戦略的に地域づくりを行うことが重要であると強調しました。

閉会にあたり竹本氏は、この日の議論と成果をもとに、続く第2回のセミナーでは都市と生物多様性、及び GIAHS の取り組み等について議論を深めたいと述べ、国際社会への発信の原点は地域にあることを強調し、セミナーを締めくくりました。



パネリストの皆さん：左より香坂、渡邊、鈴木、中村各氏